

厳しい環境の中、小規模でもつながる農業を

—島牧村農業の意見交換会と「森・川・海づくり」植樹会—

食産業研究会 柴田 登

1. 『日本海のシャングリラ』と『行き付けのふるさと』

昨年度末で解散した地域産業研究会の平成15年度現地見学会で寿都町を訪れた際、役場の皆さんとの交流会場「大谷会館」の大広間に「寿都と書いてことぶきのみやこと詠む」とある掛け軸を見た時、頭に浮かんだのはジェームズ・ヒルトンの小説「失われた地平線」に出てくる理想郷シャングリラだった。

以来、私にとって寿都町のイメージはゆったりと時間を過ごせる『日本海のシャングリラ』だった。

そのイメージは、5年前から地域活性化の活動対象に加わって戴いた寿都町隣接の島牧村・黒松内町へと広がり、山・川・海それぞれの特徴を持つ3町村がまとまってその感は更に強くなった。

今年の黒松内町ビーフ天国前夜祭の時、役場の方が「都会の人たちが『行き付けのふるさと』と思って気軽に訪れて貰える町にしていきたい」と言われるのを聞き、その響きの心地良さがビールの酔いに加わった。

理想郷に抱く憧れとふるさとの優しさ・懐かしさ…、厳しい自然環境の中にもふところの深さを感じる南後志3町村である。

2. 島牧村農業の現地見学と情報交換会

(1) 島牧村の概要

島牧村は北海道の南西部、後志管内の南端に位置し、北東は寿都町、南東は黒松内町、南西は檜山管内せたな町、南南東は今金町、渡島管内長万部町に接し、北西部は日本海に面している。

面積は437.26km²、人口は約1,800人の漁業を基幹産業とする村である。狩場山地とその急峻な

地形がそのまま海に落ち込む断崖美から成る狩場茂津多道立自然公園がある。林野率は92.6%で、約10,700haの日本最大級のブナ原生林があり、そのふところには日本の滝百選に選ばれた「賀老の滝」がある。海岸線には日本の渚百選に選ばれた「江戸島海岸」がある。

平均海面から塔頂までの高さが日本一の灯台がある茂津多岬は明治以前から神威岬(積丹町)や雄冬岬(現在の石狩市浜益区)と並び、「西蝦夷地の三陰岬」と呼ばれる海上交通の難所だった。大正の末期、その急崖の続く永豊地区と大平地区の1.2km間には15本もの短いトンネルが掘られ、初めて村内に乗合自動車が行ったのは1926年(昭和元年)。海岸線の道路不通区間は長く「幻の国道」と呼ばれていたが、1960年代前半に国道229号の指定もあって整備改良が進み、茂津多トンネル(完成年と同じ1,974m。完成当時、道路トンネルとしては北海道一の延長)が1974年(昭和49年)に完成、前後の国道も1976年(昭和51年)に開通、幻の国道は漸く解消することとなった。

(2) 島牧村農業の現地見学

これまで島牧村の農業について地元の方々との意見交換の機会が少なかったことから、「森・川・海づくり」植樹会に併せて昨年に続き農家の皆さんと意見交換会を行うことになり、6月12日、13日の2日間技術士5名で訪問した。

完全無農薬で米づくりに取り組み『榊里の俵米』として販売している波多野信夫さんなど地元関係者と道の駅「よってけ島牧!」で落ち合い、見学先を案内して戴いた。

①道の駅での地元特産品販売状況

- ・農産物(米、賀老米から作られた日本酒・焼酎など)
- ・海産物(ほっけ、うに、こなご、佃煮、塩辛、干物などの加工品)

②熊谷さん宅の野菜ハウス(メロン、葉物野菜)

③菅原さん宅のサクランボ栽培

④坂下さん宅の椎茸栽培

⑤株式会社さんかいらくの山菜加工施設

見学先の農家の方々はようてい農協と協定しているアスパラを除いて、販売先は道の駅や個人からの注文、郵パックなどに頼る一方、農山加工部会は道の駅などで軽トラック市を開催しているとのこと。

サクランボ栽培の方のお話では、宮内(ぐうない)温泉までの沢の年間平均気温は伊達に匹敵する環境だが、今年は見学時の6月始めまで雨が全く無く、花が異常に咲き、結果しても粒が大きくなり出荷できない状況とのことだった。

菌床によるシイタケ栽培農家では、見学時は温室の半分を使って約4,000鉢を栽培中で、全体で8,000鉢の栽培計画で出荷時期を分けているとのこと。

この春、急に撤退した業者に代わることになった(株)さんかいらくの山菜加工施設では、季節柄、タケノコの皮むきから煮沸、20L缶詰めまでの作業が地元の主婦たちの手で行われていた。見学中にも地元の人が月越峠や賀老高原などで採ってきた赤ダケ、青ダケを持ちこんでいた。原材料に対し歩留まりは半分程度で、この加工場では年間約40tを扱い、(株)さんかいらくでは生協などに卸すとのこと。

(3) 島牧村の農業の概略推移

見学会の後、旧島牧村農業協同組合事務所で波多野さんと果樹栽培農家菅原さん、役場天満産業課長、後藤村会議員、(株)さんかいらく星野社長、技術士会4名の参加で島牧村農業に関する情報交換会を行った。

波多野さんから島牧村農業の置かれている状況について次のような説明があった。

森林率が90%を超える山間地で、鯨漁を求めて

定住した漁村のため、農地の利用面積は少ない。気候は暖流の日本海に面し温暖。

第二次大戦後、米の自給目的で漁家にも田圃の造成が進められ昭和40年代には200haを超えるまでになり、なめこ栽培、山菜加工などに積極的な投資がなされた。しかし、米の生産調整が行われるようになり、条件の悪い田圃は休耕田となり、水田面積は現在20ha台に激減している。

農協解散前の販売取扱高は次のようである。

表-1 農協の販売取扱高の推移

単位：万円

品 目	平成8年度	平成18年度
米	1,158	565
アスパラ	695	218
肉牛	6,765	3,127
椎茸	2,127	1,682
その他	344	17
計	11,090	5,611

島牧村農協は平成20年5月に解散、現在、波多野さんが中心となって島牧農業振興会を組織し、米、アスパラ、農山加工の部会で活動しながら不良債権清算事務を行っている。

米部会は賀老米の名前で道の駅で地元米として販売、アスパラ部会はようてい農協と協定して販売、18年度旧農協扱いでは2.7tだったものを19年度は9.1tの出荷を果たしている。新設の農山加工部会は軽トラック市を企画、道の駅などの対面販売で振興会活動を活性化させている。



写真-1 旧島牧村農協事務所での意見交換会

(4) 島牧村の農業の現状と今後の方向性

技術士会からは、伊藤会長が島牧村の農業に関して後志総合振興局管内全体との比較データを紹介しながら特徴と今後の方向性について意見を述べた。

伊藤会長の提供資料を示すが、数字は何れも後志総合振興局管内農業概要より算出したもの。

表-2 島牧村の農業規模と後志管内全体との比較

項目	A 島牧村	B 後志管内	A/B (%)
総面積 (km ²)	437.26	4,305.83	10.2
人口 (人)	1,879	234,377	0.8
農業就業人口	52	6,469	0.8
59 歳以下	16	3,042	0.5
総農家数 (戸)	64	3,278	2.0
販売農家数	43	2,765	1.6
専門農家数	13	1,389	0.9
1 種兼業	1	943	0.1
2 種兼業	29	433	6.7
耕地面積 (ha)	388	35,977	1.1
田耕地	35	8,835	0.4
本地	31	8,253	0.4
畑耕地	353	27,142	1.3

表-3 主な農作物の収穫量比較

単位：ha、kg、t

農作物	島牧村			後志管内		
	作付面積	10 a 収量	収穫量	作付面積	10 a 収量	収穫量
水稻	24	440	106	4,940	534	26,400
馬鈴薯	5	1,460	73	4,520	3,110	140,600
小豆	4	198	8	1,930	241	4,630
アスパラ	17	173	22	376	204	574
ぶどう	3	67	2	829	908	7,530
大根	1	3,400	34	645	4,350	28,100
スイートコーン	4	675	27	688	998	6,870
牧草	257	2,540	6,530	7,040	2,950	207,400
青刈トウモロコシ	2	3,750	75	670	5,000	33,500

データ中、水稻は平成 22 年度、馬鈴薯は平成 21 年度、その他は平成 18 年度実績

表-4 畜産業の比較

単位：戸、頭

家畜	島牧村			後志管内		
	飼養戸数	飼養頭数	内 乳用牛	飼養戸数	飼養頭数	内 乳用牛
肉用牛	4	270	-	65	4,510	2,500

データは平成 19 年度実績
肉用牛は黒毛和種

農業産出額について同様に比較表で示す。

表-5 農作物産出額の島牧村と後志管内全体の比較

単位：百万円

	小計	米	麦類	雑穀類
島牧村	50	20	-	0
後志管内	34,410	4,860	690	2,120

いも類	野菜	果実	花卉	工芸	その他
0	30	0	-	-	10
5,470	14,570	4,090	600	1,490	520

表-6 畜産業産出額の島牧村と後志管内の比較

単位：百万円

	小計	肉用牛	乳用牛	豚	鶏
島牧村	40	40	-	-	-
後志管内	6,760	810	2,630	3,170	120

その他
0
40

表-7 産出額合計

単位：百万円

	合計
島牧村	100
後志管内	41,170

島牧村の農業の特徴と今後の方向性については以下に記す。

1) 島牧村の農業の特徴

- ① 狭小な土地の中、厳しい環境に合った農業
- ② 統計からはアスパラガスとぶどうの存在

2) 日本の「食」の問題の関心事

- ① 食糧自給率の低さ
- ② 食品の安全性
- ③ 肥満や生活習慣病の増加

3) 島牧村の農業の今後の方向性

① 環境的にはフルーツの可能性大

後志地方は全道に占めるフルーツの比率が高い

② 地産地消

農家の振興、地元の理解、省エネ、エコな農業

③旬産旬消

季節の味覚、作物自然本来の味

④コミュニケーションの発生

道の駅、対面販売・対話による人とのつながり

⑤適地適作

自然条件を活かした省エネハウス栽培

(5)意見交換

畠谷技術士からは、亜臨界水処理の農業や漁業への応用、特に肥料化、飼料化について、現在取り組んでいる事例をまじえて紹介があった。

国の推し進める大規模経営とは違い、小規模でも無駄を省き、つながりを大切にしながら、島牧の農業の持つ地域性や島牧の持つ大きさと力を商品の付加価値として活かせる農業を目標として進めていきたい、黒松内や寿都とも連携し、まちづくりに活かされている方法や技術も参考にしたい、技術士の力も借りたいと言う波多野さんの発言があった。

ブランド化や発信が必要という意見の一方、地方から消費者にそれをつなぐ難しさも出の中で、この春から山菜加工場を運営する(株)さんかいらくの星野社長から以下のような心強い発言があった。

島牧村は知名度が低い、漁業の町としては一般的な海岸線に沿った細長い地形的展開で、自然景観も良く、防潮堤も整備されており海水浴場もあるので花などの付加価値で観光客の呼び込みを工夫する余地がある。

農家戸数は少なく、一品目を大々的にというのは無理だが、黒松内町から続く延長線上で観光を加味した取組が望ましい。東北や関東、関西にも取引先があるが、そういう所は量を求められることから難しい。島牧の農産物は量が付いていかない代わりに道内の生協などへ特産品として紹介することはできる。道の駅を発信源とする方法もあり流通経路は考えられる。縁あってこの春から引き受けた加工場を先ず軌道に乗せることが先決だが、今回のような人をつなぐを大事にして協力範囲を拡げて行きたい。

村の側からは、島牧村の農業は小規模のためこれまで農業振興の基盤づくりの機運は無かった、井の

中の蛙に陥らずこのような外からの180度違う考え方を大事にしたい、島牧の農業者には少量でも自分で値段を決められる良い物を作る意欲と工夫が大事、無農薬など自然に優しい農業と言われるが技術士には島牧に合った農業のやり方をアドバイスして欲しい、などの意見や希望が出された。

最後に伊藤会長から、狭隘な農地というハンディの中、有機栽培などで特徴を出そうという島牧村農業の現状から、道内他地域で行われている燃料や電気などのエネルギー多消費型農業や大型機械化農業とは違った形の、小規模・少量多品種であっても、土地、歴史、自然、人、それらのつながりを活かす取組が島牧村農業の強さの特徴になるという希望を込めた総括があって意見交換会を締めた。

3. 「森・川・海づくり」植樹会

12日夜は、島牧ユースホテル(ペンション/ネイチャー in 島牧)で、島牧の旬の味覚を味わいながら、見学先の農家の方々、役場の方々と意見交換の続きを行った。

13日朝、島牧全域のネイチャーガイドをしているユースホテルのご主人、吉澤隆さんから島牧村の地形・気象・動植物について興味深い話が聞けた。

このユースホテルは平成5年7月の北海道南西沖地震の津波で流され、その2年後自力再建したもので、食器、家具などはご家族のお手製、食材も魚、山菜はご主人と息子さんが採ってくる温かい雰囲気のある所。

10時からは遠く残雪の残る狩場山を望む賀老高原に60名程の参加者で「森・川・海づくり」植樹会。藤澤村長、鳴海後志総合振興局産業振興部長、入口後志森林管理署長のご挨拶、参加した小学5年生に向けた丁寧な植樹指導の後、早速、笹の根が残る土を掘り返し苗木を植え、草の付いた表土をひっくり返し座布団のように被せて1本上がり。ブナとミズナラの苗木200本を30分足らずで植え終えた。

この日はその後、植樹会に参加していた「島牧で楽しむ会」の杉山幸代さんが後志管内で行われる植

樹イベントのために苗木を育てている現場や協力者の所を見学してそれぞれ帰途に就いた。

4. 厳しさこそ物作りの原点

4月7日から5月6日の間、北海道立近代美術館で、創作の原点は島牧にあるという前衛美術家阿部典英の展覧会があり、島牧村の見学を控えていることもあり関心を持って観に行った。

作品にも強い印象を受けたが、第二次大戦の戦中・戦後を島牧で過ごした時期を記した文章には更に深いものを感じた。長いが紹介する。

「削って削って、そして黒鉛を何度も何度も擦り付ける。そして磨く。力を込めて。寒風に晒された屋外での作業でも汗がポタポタ落ちる。何と原始的な行為の連続なのか。人類の歴史の中にこの行為があつてこそ偉大な文化の蓄積があつたのだ。この行為こそ物作りの原点であろう。

私の原風景は電気のなかった田舎にある。熊笹の

張根を引っこ抜き、根株を抜き、石ころを拾う。先人の開墾した畑を更に広げわずかなイモを収穫する為に。

ソ連に抑留された父のいない家庭で母は肥しを担ぎ山道を登る。その後を歩ける子供5人が弟、妹をおんぶして続く。

こんな原風景を思い出し自分自身の心と肉体の再墾を願う行為は続く。」

生きるための食料を得る行為という少年時代の島牧での原体験が、前衛美術家としての心と肉体の再墾に今もつながっている、その緊張感と遊び心が作品からも伝わってきた。

見学会の後、大型化や量産を望めない島牧の農業の生き残る根性として、地理的条件や地形、気象など、この島牧の厳しい環境条件の中に如何に根を張るか、その知恵と工夫、厳しさの中から産み出される島牧ならではの本物、そして外とつなぐネットワークが大事になるのではという感想を持った。

柴田 登 (しばた のぼる)

技術士(建設部門)

個人事務所
あいの里まちかどコンサルタント

